UIAコペンハーゲン・コングレス参加報告 vol.2

2023年7月2日～9日　デンマーク・コペンハーゲン

前号に引き続いて、UIAコペンハーゲン・コングレスの参加報告をお届けします。

SDGsマニフェストリレー・セッション

45のマニフェストを今後どう活かすのか

慶野正司（関東甲信越支部）

思いも寄らずUIA大会への参加機会をいただいたのは誠に幸いであった。そもそも観光や視察以外の目的で渡航するのは初めてであり、期待と使命感を抱きながらの参加である。辿り着いたコペンハーゲンでは、豊かな歴史を受け継ぐ街並み、洗練された北欧デザイン、先端を走る建築物、数々の魅力に触れることができた。そして何より世界の多くの意欲的な建築家たちの中に身をおいたことは感慨深い。そのような貴重な機会をいただいたJIAの皆様に感謝します。

私のミッションは、大会イベントの1つであるSDGsマニフェストリレー・セッションに参加することである。これはSDGsの持続的推進を目的とし、世界から実践事例やコンセプトを集め共有し、その意思を繋いでいこうという意義ある企画であり、幸いにも日本から出展する3作品の1つとして選ばれたことから始まった。主催者側から事前に参加者それぞれにプレゼン・スピーチの要求があり、英会話の苦手な私は練習を重ね意気揚々と当日を迎えた。しかし急遽プログラムが変わり、その成果を果たすことなく終了し残念であったが、出展した「吉田村village」が少なくとも会場に紹介されたことは価値あることと理解することにした。

しかし1年間をかけて世界から集めた総数45のマニフェストを今後いかに活かしていこうとするのか？？一過性の企画ではないことを願う。

（けいの まさし／アトリエ慶野正司）

世界へ発信するはじめの一歩（IMR）

所 千夏（近畿支部）

2023年7月コペンハーゲンへ渡航。UIA世界大会、国際マニフェストリレー（IMR）のセッションに参加した。本番のIMRセッションは、4日午前中ベラ・センター内の比較的広いセッション会場で行われた。

IMRの提案は、19カ国から合計45提案。日本3名を含め、当日提案者26名が登壇すると事前にホームページにも掲載されており、当日どう進行するのかと思っていたが、結局提案者のうち6名がコーディネーターとともに登壇、パネルディスカッション形式で、時折議論のテーマに沿って会場から意見を求める形だった。出国前に各自が提出した、提案に沿った写真1枚とOne wordが、登壇者の後ろのスクリーンに繰り返しスライドショーで流されていたが、その説明の機会もなかった。おそらく当日意見を言ったのは10名強程度、半数以上が発表の機会がないままセッションは終了してしまった。

自ら発表の機会をつくれなかった反省も含め、思いが残る結果だったが、世界へ発信する第一歩は踏み出せたであろう。それに参加しなければ感じられない、各国の建築家たちのエネルギーに直接触れられたのは貴重な体験だったと、心より感謝している。

（ところ ちか／アトリエCK）

「技術の共有」から「目的の共有」へ

漢那 潤（沖縄支部）

沖縄での建築活動に追われる日々から一転、建築の世界潮流をコペンハーゲンで堪能した2週間であった。今回はSDGsがテーマであったため、建築材料から流通、経済格差や歴史視点、気候変動に対するアプローチにまで話題が及んでいた。その中で、展示や講演などを通して印象に残ったこととして、アジア、アフリカなどの植民地経験国から近代建築文化からの脱皮の提案や主張が多くあったことが挙げられる。

近代は産業革命から始まり、技術を共有していく時代であった。それは均一化された社会風景を生み、固有の各地域の環境を破壊した。今後、SDGsが叫ばれ始めていく中で、あらゆる「種」の存続という目的が共有されていく時代となる。その流れの上で各地域の建築文化は多様性を含有するものではなく、多角的な地域条件、共有された目的をもとに、1つの方向性に集約されていくだろう。これまでの建築家の社会的役割を一変させていくような大きな変化のうねりが生まれているように思えた。

（かんな じゅん／ISSHO Architects）

パネルディスカッションの様子

左から、日本から参加した慶野氏、所氏、漢那氏と佐藤JIA会長

参加者が登壇

Golden Cubes Awards

セミナー発表と授賞式に参加して

福口朋子（有限会社 設計機構ワークス）

UIAゴールデンキューブ賞（以下GC賞）のセミナー発表は、「Built Environment Education（BEE）」というワーキンググループで行われました。BEEは、世界中の子どもや若者のための建築環境教育を指し、そこで働く建築家を集めた組織である「The UIA Architecture & Children」がGC賞をアレンジしています。

司会進行は、UIA Architecture & Children Work Programmeの共同ディレクターであるSuzanne de Lavalさん（フィンランド）とHeba Safey Eldeenさん（エジプト）です。HebaさんはGC賞の審査員でもありました。

セミナーは終始とても和やかな雰囲気で進み、発表者・聴講者ともに笑顔が多く見られました。

最優秀賞4点と特別賞8点は、31カ国81作品の中から選ばれ、各部門最優秀賞の受賞団体1組ずつ、計4組の発表が行われました。私たちは学校部門の最優秀作品として、「Workshop centred on building a straw hut（藁小屋造りを中心とした体験型学習～「円庭」づくりの一環として～）」の発表を行いました。その他に、ブルガリアにおけるBEEプログラムの紹介、トルコ地震後の地域での子どもたちにスペース活用の変化に関する発表が行われ、共に学び合う場となりました。

視聴覚作品部門では、子どもの視点でエジプトの都市を撮影した映像をつなぎ合わせて作られた映画が最優秀作品に選ばれました。映画制作を通して、歴史的地域の自然遺産や都市遺産に対する子ども自身の見方や関係性の変化を捉えている点が評価されました。

組織部門では、30年以上続くドイツのミニミュンヘンでの取り組みが最優秀作品として発表されました。すでに世界的に有名な取り組みですが、近年の活動では、子どもたちの共同設計・建設によるちいさな都市がつくられています。人が中に入れるスケールをもった都市を、子どもたちが自らの手で作り続けられていることもそうですが、そのプロセスを丁寧に記録していることもプロジェクトの素晴らしい点です。

出版部門では、ベルギーにおける抽象的空間思考のワークショップ結果を体系的に1冊にまとめた本が最優秀作品として発表されました。本を活用することで工芸や彫刻、空間造形やランドスケープなどさまざまなフェーズでのBEE教育をサポートする役割が期待できる点が優れていました。

学校部門では、日本の伝統技法である茅葺を用いた藁小屋をつくるワークショップを中心とした体験型学習について発表を行いました。茅の収穫から古茅を解いて左官壁になるところまで、体験や見学を通して、自分たちが生活している地域の文化や伝統、資源の循環について子どもたちの「日常」の中で学ぶプログラムです。発表を終えた後、Hebaさんから「根底にあるコンセプトを含めて評価しました」というコメントをいただきました。

セミナー発表の様子

GC賞展示ブースでの集合写真

部門ごとにアプローチやスケールは異なりますが、いずれの作品も建築や環境に関する「学び」の在り方も含め、大人も一緒に楽しく模索しチャレンジし続けている姿が共通していたように思います。

授賞式では7,000名の収容が可能なホールを会場に、GC賞を含めた7つの賞の表彰が行われ、日本からは特別賞を受賞された「SDGsスーパーシティゲームの開発～まちづくりを通じたSDGsの加速～」と私たちの2団体が表彰の対象として賞状をいただきました。

また、発表の場だけではなく事前準備段階からスマートフォンアプリを使って発表者やディレクターが友人のようにコミュニケーションを取り合い、発表を終えた後も情報共有の場として活用していたことも印象に残っています。「これからも連絡を取り合い一緒に学んでいきましょう」とSuzanneさんが言っていたように、学び合い、国境を越え共に成長していけるネットワークを構築することもGC賞の目的の1つであったように思います。

（ふくぐち ともこ／有限会社 設計機構ワークス）

7,000名を収容できるホールでのGC賞授賞式

受賞者が登壇

授賞式のあとで記念撮影

UIA国際大会23を振り返って

佐藤尚巳（JIA会長）

北欧の美しい街コペンハーゲンは、UNESCOとUIAによってWorld Capital of Architecture 23に指定され、7月上旬にUIA世界大会が開催された。1960年代の車中心の街から半世紀をかけて人間中心の街に見事に変貌させた、SDGsを論じるにはこれ以上ふさわしい街はないだろう。

今大会のテーマは、「Sustainable Futures Leave No One Behind＝持続可能な未来・誰も取り残さない」。貧困、飢餓、水、居住、健康、気候変動等の全人類が直面する緊急事態に建築家はいかに挑戦するのか、という問いかけである。途上国と先進国では問題意識に差はあるが、各々の立場で関心事を披露し、議論し、意識を共有できたのではないか。

コペンハーゲンの街並み

EUのデジタル時代担当責任者が「気候変動は喫緊の課題であることは明白だが、それを解決する際にサステナブル（持続可能）、インクルーシブ（誰をも受け入れる）、そしてビューティフル（質の確保）が大切だ」と発言し、建築家に向けての重要なメッセージが発信された。途上国では扱う事象は異なるが、解決に向けたアイデアとリーダシップが建築家に期待されているのは間違いない。

会場のベラ・センター

開会式典

（さとう なおみ／佐藤尚巳建築研究所）

2023-2026 UIA リージョンIV カウンシルメンバー着任のご報告と抱負

国広ジョージ（FJIA, FAIA）

このたび、2017年のソウル大会以来となる「UIA 2023 コペンハーゲン世界建築家会議」に参加いたしました。

私はこれまで、2002年のベルリン大会以来、過去6回の大会に参加してきました。20年前のJIA会員たちの夢は、日本を代表してUIAメンバーとなり、3年に一度開催されるUIA大会を誘致することでした。当時の諸先輩、そして私たち同期の会員にとって大会開催が国際舞台で日本建築界の存在を示す大きな挑戦であると考え、全力で2005年に誘致を達成したのです。そして、2011年9月、東京大会の開催を実現し、その夢が現実となったのでした。

それから13年経ち、UIAにおけるJIAの存在は消え去ってしまいました。UIA東京大会実現の功労者たちは第一線から退き、今やUIAとの繋がりを持つ会員はほとんど皆無の状態となってしまいました。私も同世代ですが、幸い現在でもUIAネットワークを大切に維持してきたこともあり、これを活用して次世代のJIAが再び往年の国際派建築家組織JIAであったようになってほしい！との「継承」の想いから、UIAカウンシルメンバー（評議員）へ立候補することを提案しました。幸い竹馬国際委員長の理解を得られ、佐藤会長および理事会より承認を得ることができました。コペンハーゲン大会の現場では、会長および代表団のご尽力により第29回UIA総会において、JIAとして第4リージョンを代表するカウンシルメンバーの席を無事に獲得することに至りました。

挨拶される国広氏

私の抱負は、今後3年間の任期中に、UIAにおいてJIAの存在感を示し、代行議員として指名された次世代のJIA建築家たちと共に毎月開かれる議会に参加して、彼らがUIAでのネットワークを構築できるようにサポートしていくことです。

そして、JIA会員の皆さまにUIAとの繋がりの重要性についてご理解いただけるよう、国際建築家社会の情報を速やかにお伝えしていくことに精進いたします。何卒よろしくお願いいたします。

（くにひろ じょーじ／ティーライフ環境ラボ）

JIAのUIAにおける今後の活動

竹馬大二（JIA国際委員長）

筆者は国際委員長を拝命して2回目のUIA大会へ出席した。今年度も前回に引き続きUIAにおける日本のプレゼンス向上と活動への積極参加を目標にしており、2023-2026年期の評議員に国広ジョージ氏（高階澄人氏が代理評議員）が選出されたことで目標達成に向けた布石が打てたのではないかと思う。また、委員会活動においても、SDGs委員会（岩橋国際委員）、職能委員会（藤沼国際委員）、建築と子供教育WP（田口国際委員）、社会住宅WP（坂田国際委員）、ヘリテージWP（竹馬国際委員長・筆者）への派遣を継続しており、これらの活動を通して世界の動向をJIA会員と情報共有することも、併せて行っていきたい。

ウェルカムレセプション

（ちくば だいじ／日建設計）